

山口県と日系移民のフィールドスタディ (1)  
～ 南加山口県人会における日系三世を事例として～  
Field Study on Yamaguchi Prefecture and  
Japanese American Immigrants (1)  
～ A Case Study of Nikkei Sansei in the Nanka Yamaguchi Kenjinkai ～

水谷由美子 (山口県立大学名誉教授)

Yumiko Mizutani (Emerita Professor at Yamaguchi Prefectural University)

キーワード: 日系移民 日系三世 南加山口県人会 フィールドスタディ

Keywords: Japanese Immigrant, Nikkei Sansei, Nanka Yamaguchi Kenjinkai, Field Study

要旨

本論は、山口県と日系移民のフィールドスタディとして、南加山口県人会に所属する日系三世及び新一世を対象として、2023年9月に実施したフィールドワークのフィールドノートである。Aは日系三世に当たり、アメリカ本土で生まれた。Bは帰米日系人の父親が日本に帰国した時に日本で生まれた。そしてCはペルーの日系三世であるが、留学後アメリカに移住している日系新一世である。

インタビューの前に、上記3名とともに日本人街で、リトル東京にある全米日系人博物館を、ドセントと呼ばれる日系移民のボランティアガイドの案内で見学した。ここでの体験を共通の情報として持った上で、非構築的な直接インタビューを行った。そこでは、先祖の移住、戦争、キャンプと言われる強制収容所、日系人のみにより編成された第442連隊戦闘団そして個人の人生について話された。

本論は歴史的な事実と個人の家族の話を照らし合わせながら、南加山口県人会の移民の実態を個人のレベルから浮き彫りにしようとしたものである。

Executive Summary:

This article is a field note from fieldwork conducted in September 2023 on Sansei and new Issei of Japanese descent belonging to the Nanka Yamaguchi Kenjinkai. It serves as a field study of Yamaguchi Prefecture and Japanese immigrants. A is a Sansei of Japanese descent and born in the mainland United States. B was born in Japan when his father, a returned Japanese American, went back to Japan. C is a Peruvian Nikkei Sansei who immigrated to the United States after studying abroad.

Before the interview, we visited the Japanese American National Museum in Little Tokyo, an area known as a Japanese neighborhood, with a volunteer daent guide, who was a Japanese immigrant. Having common information about their experiences here, we conducted unstructured direct interviews. They discussed their ancestors' immigration, the war, the concentration camps, the 442nd Regimental Combat Team (an all-Japanese regiment), and their personal lives.

This paper attempts to highlight the immigrant reality of the Nanka Yamaguchi Kenjinkai on a personal level by comparing historical facts with personal family stories.

## 1 はじめに

山口県からの移民はまずハワイへ官約移民（1885年-1894年）の制度下において、行われた。主に、瀬戸内海側の東部地域の人が多く、周防大島は中でも移民の割合が多かった。

ハワイ官約移民制度が廃止されて以降は、民間の移民会社が移民を斡旋するようになり、山口県からは広島、沖縄、熊本と並んでハワイやアメリカの本土に多くの人が渡った。

周防大島とハワイ州のカウアイ島との長い交流を礎として、山口県とハワイ州が2022年に山口県において、2023年にはハワイ州において正式に姉妹県・州の提携の調印がされた。

筆者は2022年に「周防大島高校アロハプロジェクト」及び「周防大島ハワイ化計画」を山口県からの受託研究及び山口県立大学の学術創作研究助成によって行った。

これらのプロジェクトに関する情報収集のためのフィールドリサーチで、周防大島町西屋代にある日本ハワイ移民資料館を訪ねた。そこで日系アメリカ人について、また、移民した人々と故郷の関係によって、周防大島の人々の生活がどのような影響を受けたかなどについて興味を抱いた。

そこで既にアロハシャツのデザインプロジェクトは終えているが、改めて俯瞰的な視点から、移民についてフィールドリサーチを行うことにした。ハワイでのフィールドスタディは一定の知見を得るために行ったが、まだ現地でのインタビューに至っていないので次の課題にする。まず、ロサンゼルスには全米日系人博物館があるので、全米の視点から日経移民の実態を把握することが有益だと考える。

筆者は服飾文化・デザインの専門家だが、日系移民文化史の広野を探索する中で、服飾の状況が見えてくると期待している。まずは、アメリカ本土カリフォルニア州の日系人について、特にロサンゼルスに本拠を置く南加山口県人会をフィールドとして調査することにした。

本稿は2023年9月初旬に実施した南加山口県人会のメンバーである日系アメリカ人三世への直接的及び非構築的インタビューを記述したフィールドノートである。ここではインタビューに答えたインタビューの語る個人的な家族の物語を歴史の事実と照らしながら、個別から普遍へと日系アメリカ人への理解を深めることを目的としている。南加とは南カリフォルニアの略である。以下では個人情報を守る視点から、インタビューをアルファベットで記す。

山口県人会へのインタビューは、以下で記すBさんとラインやライン電話を通じて前後に頻繁に行われた。次に、現地では9月7日に全米日系人博物館（写真1-a,写真1-b）及び同10日の自宅等で行わ

れた。他県の日系三世及び日系新一世へのインタビューは個別及びグループディスカッション形式にて露符合同協会（写真2）の中で日曜日のミサの後で行われた。



写真1-a 全米日系人博物館



写真1-b 全米日系人博物館正面玄関



写真2 露符合同教会

山口県人会のインタビューはアメリカ合衆国生まれのA、山口県生まれのBの日系三世で、ペルー生まれのCはペルーにおいて日系三世で、ロサンゼルスでは日系新一世であった。

特にアメリカ本土へ移住した人々に欠かせない大きな歴史的事実は、第二次世界大戦勃発によって、強制収用所（以下ではキャンプと記す）に入れ

られたことである。日本はハワイで真珠湾攻撃をしたために、アメリカ合衆国の直接的な敵国になった。キャンプの体験はほとんど子孫に語られることがなかったため、全米日系人博物館の存在が実態を白日の元に晒すことになった。

以下では、全米日系人博物館をAさん、BさんそしてCさんと一緒に見学した後に、3人へのインタビューをした。その結果を記述する。また、比較検討するために広島県出身者やその他の地域の人との集団ディスカッションから得られた日系移民の人々についても記述する。

最後に南加山口県人会の歴史や活動その意義について検討する。特に一世と二世の時代には異民族間で結婚が法的に許されていない時代だったので、両親ともに日本人であったが、三世以降は多様な民族の人々との結婚がされており、混血が進んでいる。こうした現状における山口県人会の果たす役割や未来への可能性についても検討する。

## 2 Aさんの場合

祖父母は周防大島の出身で、当初、ハワイのカウアイ島に移住して、パイナップル畑やサトウキビ畑で働いた。その時に日本ですでに生まれていた2人の男子を連れて行った。ハワイでも2人の男子が生まれた。また日本に帰った時に男子が生まれた。その時に、A（以下敬称を省く）の父親は日本に帰らなかった。その時、父親は14歳だった。

その後、父親はハワイから本土に移住した。そこで日系女性と結婚し、男子1人と女子1人をもうけた。この女子がAだ。さらに、最後に女子が生まれたが未熟児ですぐになくなってしまう。やがて、父親の家族はカウアイ島からオアフ島に移った。

Aの母親はロサンゼルスで生まれた。16~17歳の頃に柳井に行き叔母の家に滞在して、女学校に通った。そのために日本語ができた。当時、日系アメリカ人二世の子供を、日本に戻して日本の生活文化や日本語を勉強させたことは普通に見られることだった。なぜなら、移民した人々は、主にお金儲けをして一旗上げて日本に帰り、錦を飾ることが目的であった。つまり、アメリカに永住するつもりで移住したわけではなく、帰国の可能性が大きいのである。日本に帰った時に、子供たちが日本社会に適應できるように、日本でも教育させたのだ。

Aはロサンゼルスで生まれたが、子供の頃に家庭では日本語で両親が話していた。しかし、Aはアメリカ人であり、小学校からアメリカの学校に通うようになり、家庭でも英語で話すようになる。その後、ヨーロッパ系白人と結婚したために、日本語を話す機会も薄れ、日本語を忘れたと言っている。単語でわかるものや挨拶などはわかるが、すっかり日本語

を忘れていた印象である。Aは若々しく、非常に活発な印象なのだが76歳である。

父親はハワイに移住した時に、カウアイ島で結婚していたがうまくいかずに離婚した経験がある。その時に男子が生まれていたが、誰にも話されなかったためAはその存在を知らなかった。この兄は両親が離婚したために養子に出されていた。小さな社会であるカウアイ島の人々は、この子供のことや経緯を皆知っていたが、Aの家族は父以外に誰も知らなかった。後にAはこのカウアイ島で育った義理の異母兄弟の兄に会ったが、あまりに父とそっくりなので驚いたようだ

Aの父親は第二次世界大戦の時に、志願兵となり通訳としてパールハーバー海軍基地で働いた。第442連隊戦闘団442nd Regimental Combat Team（以下では442連隊と記す）に属していた。現在、ロサンゼルスのリトル東京にある全米日系人博物館に隣接した場所に1999年に除幕された日系人部隊記念碑Go for Broke Monumentがある(写真3-a)。その背面(写真3-b)に、16,126人の日系二世兵士の名前が刻まれている。そこで、Aと一緒にAの父親の名前KSが刻まれていることを確認した。442連隊については後の章で説明する。



3-a 日系人部隊記念碑正面



3-b 日系人部隊記念碑に刻まれた戦没者氏名

父親と母親とは本土のボーリング場で知り合い結婚した。戦後に、母親のついででロサンゼルスに来て、サンファンナンド（ロサンゼルス中心部から1時間程度の郊外）で農業を始めた。

1950年過ぎには農業を辞めて、パコイマに移り庭師の仕事をする。その後、老年になり食料品店ボーイズマーケットに勤め、その後引退した。父親はコミュニティに尽くす人生を送った。山口県人会の会長も務めた。個人的にはボーリングのチャンピオンになり、スポーツマンでもあった。

母は家政婦として白人の家に務め、英語を覚えた。その後、何軒もの家を掛け持ちして仕事をしていた。85歳まで1軒の家ではずっとやってほしいとかつての主人の娘さんから頼まれて働いた。

Aについて以下のようなエピソードがある。Aが生まれる時に母親はサンファンナンドにいた。祖母がお産をする病院を東ロサンゼルススのヴォーハイトで探したが、どこも見つからない。日本人が差別されていたからだ。結局、ユダヤ系の病院で受け入れられて、1947年にAは生まれた。ユダヤ人は流民族と言われていて、日系移民の立場を理解したのだろうとAは今になり解釈している。

Aの祖父母は日本とハワイとの間をお金儲けのために往復したが、増えたのは子供だけだったとAは笑い話のように語った。

父親は前述したように戦争中にはアメリカ軍に属しており、母親はキャンプに入っていた。Aの祖先のルーツは現在の周防大島町にあり、75歳の従兄弟が現在、住んでいる。母親の出身は柳井で、母方の祖母は写真花嫁で結婚した。祖母がアメリカの祖父のところへ嫁いだ時に祖母は19歳、祖父は42歳だった。祖父は意地悪な人だったそうで、祖父が亡くなってから祖母は2度と結婚はしたくないと思い、別の男性と同棲していた。彼は男優として働いた。Aはこの男性をお爺さんと呼んでいた。当時、再婚せずと同棲をして暮らすケースは珍しかった。

Aの両親は祖母を見ていて反発するようになった。とはいえ、祖母は賢い人でまた優しい人でもあった。戦前からイースト・ロサンゼルスに雑貨店を出していた。周りに住んでいたメキシコなど中南米からきた人たちは貧しかったので、ツケで物を買わせてあげていた。戦争が始まり祖母は家族と共にキャンプに行くことになった。そこで、中南米の人たちに1ドルで店を売り、帰ってきた時に同額の1ドルで買い戻した。そして、その店を当時の的確な値段で売却して、アパートを建てて生計を立てた。

その後の暮らしの中で、Aは母親の仏壇を持っており、正月には親戚が集まっていた。しかし、親戚も少なくなり、現在では正月に友人の家族が集まっているだけである。Aは親戚の中で唯一ハリウッド

にある墓参りを月に1度している。

昔は、両親が毎週、祖父母や家族を誘って墓参りをしてきた。同時に、リトル東京（写真4-a,4-b）でショッピングをし、レストランで食事をして帰るのが習慣だった。当時は、アジア系のはリトル東京でしか買えなかったもので、定期的にリトル東京に行ったのだ。また、当時の日系人は家族単位で行動することが多かったことも背景にある。



4-a 現在のリトル東京入口のモニュメント



4-b リトル東京の歴史を伝えるストリート壁面装飾

柳井出身の母方の祖母の3人兄弟はロサンゼルスにきて、英語は上手だった。

Aの祖父母は日本人で、両親は日系アメリカ人同士で結婚した。おおよそ日系人は二世までは法律で同じ日本人同士しか結婚が許されていなかった。三世のAの結婚については、相手が白人と知り、父親

は怒った。母親はせめて中国人などアジア系のアメリカ人と結婚してほしいと言った。法的に三世の時代には結婚は自由になった。

Aの兄の1人は3人の子供がいる。その子供の1人、つまり四世になるが、結婚相手は3つの人種が混じった人であった。日本、エジプト、シリアである。両親は孫の結婚について、もはや人種のことには言及することはなく、その結婚を喜んでいて、その人が良ければそれでいいという考え方である。

両親の人種への感覚は変化した。Aの解釈では、その変化はテレビの影響があるという。両親は保守的な人たちだったが、孫の代ということも影響しているかもしれないと言っている。父親はカウアイ島での最初の結婚に失敗して、結婚には少し敏感になっていた。また父親自身の友人がエイズで亡くなったこともあり、Aが女性同士でよく旅行をしていたのでAがレズビアンだと思っていたらしい。

以上がアメリカで生まれた日系三世の女性のインタビューの結果である。Aは2015年に山口県人会世界大会以来、南加山口県人会の会計を担当している。

### 3 Bさんの場合

Bは日系三世の女性で74歳である。現役時代は正看護師、保健師、HIVや結核の専門看護師であった。特に、結核専門看護師としてダウンタウンで主にホームレスの黒人の治療にあたった。父親は岩国出身で、婦米人、つまりアメリカから一度、日本に帰って来たが、再度、アメリカに移住した人である。父親が日本に帰国した時にBは誕生して13歳の時に父親が婦米したので、同行し移住した。

父親は叔父が経営していた農園で働くためにサンディエゴに移住した。叔父は当時300人を雇うほどの規模の農園を経営していた。この農園は、第二次世界大戦が勃発し、叔父がキャンプに行くために閉じられた。今、その土地はサンディエゴにおける海軍のキャンプ地になっている。

Bの父親はマンザナ（カリフォルニア州）のキャンプに入った。戦後、岩国に一時帰国していた時に父親は結婚した。母親も岩国の人であった。2人はBを連れてロサンゼルスに移住した。そこで父親はピッツァを作る会社に勤めた。婦米して5年後、父親はBが18歳の時に亡くなった。母親は和裁も洋裁もできたので衣服を作る工場で働いた。母親は英語を話せなかったため、Bは家庭の中では日本語、学校や仕事場では英語と少しのスペイン語を話してきた。家では自分のルーツの話を楽しんだ。

15歳の時に洗礼を受け、プロテスタントの教会に属している。家族の宗教であった仏教からの改宗のきっかけは新約聖書のヨハネ伝3章16節に感銘を受けたことによる。今も日曜日にはミサのために教

会に行っている。Bが教会と関係していることから、筆者は今回のフィールドワークにおける聞き取り調査を、ロサンゼルスのリトル東京にある露符共同教会にて行うことができた。

Bは大学で看護学を学び、日本語も専攻したので日本語が堪能である。大学卒業後は結核の分野で活躍した。ホームレスの結核患者に薬を提供するパイロットプログラムDOTに参加した。イエスのようなデイヴィッド・ソン医師に出会い師事した。当時、リトル東京に日本書店という本屋があり、そこで専門雑誌「保健婦」を取り寄せた。

保健関係の雑誌から3編のエッセイを頼まれて執筆した。その後、東京の山下真知子先生から手紙で結核の管理についての講演依頼を受け、1990年を皮切りに来日して2回の講演を行った。さらに、山下先生がドイツの学会に行く際にスピーカーにどうかと打診された。その結果、世界から選ばれた10人の看護師の内の1人として招聘され、1996年に結核世界学会International Union Against Tuberculosis and Lung Diseasesで、また1998年にジュネーブで開催されたエイズ世界学会12th World AIDS Conference Genevaでスピーチをした。専門家としてストリートで困っている結核やエイズの人々に手を差し伸べる仕事を長年してきた。

Bは学術的な経験や日本語ができることで、今回南加山口県人会から推薦を受け、筆者のインタビューのアレンジ役を引き受けた。

山口県人会以外の人のお話も収取したらどうかという考えで、Bは筆者のために9月10日（日曜日）の露符共同教会で行われたミサの後のグループインタビューを設定した。そこでは、広島からの移民や最近、移住した新一世と言われている人々、あるいは自分は移民ではないと考えている人など、多くのインタビューと話すことができた。

前記の教会でのインタビューの後、Bは現在の住居を案内するために、筆者を乗せてドライブした。その途中で、エバーグリーン墓地Evergreen Cemetery Los Angelesに寄った。1877年に設立されたこの墓地は、市内最古でかつ最大規模の墓地の一つである。多民族の人々のセクションがあり、ここには日本人のセクション（写真5）もある。1949年に第二次世界大戦で戦死した第442連隊戦闘団の日系アメリカ人兵士を追悼するために、ここに記念碑が建てられた。個人の日系アメリカ人の墓碑には日本語で名前が記されているので、日系人の墓とすぐに理解された。

その後、Bが老後の暮らしを紹介したいということで、現在の住居まで案内された。現在のアメリカ社会における老後の暮らしを支える施設の形態にコミュニティがある。Bが住むプロテスタント系の

コミュニティには広い敷地の中に、アパートメントタイプ、テラスハウス、そして1戸建ての家などが建っている。そこにレストランやコンシェルジュデスクそして事務所が一緒になった棟がある。また、病院やリハビリの施設もある。Bはテラスハウスの独立した暮らしをするタイプに住んでいる。庭は独立しているが、テラスそのものは設置されていないタイプの1軒家に住んでいる。



5 エバーグリーン墓地における日系移民の墓

Bは現在、引退して悠々自適の暮らしをしている。良い時期に働き始めたということで、十分な年金があり、それが暮らしを支えていると語った。前述したように、ここのコミュニティには老人ホームNursing Homeがあり、いざという時には面倒を診てもらえるので安心して暮らすことができる。足を悪くしているが、今は車を運転することができているので、ロサンゼルス街に出ることも容易である。駐車場は家の前の敷地にある。食事レストランに行き、毎食食べることができる。

父親が亡くなった後は母親と2人で暮らし、1人になってからそれまでの自宅を離れて、現在のコミュニティに移った。レストランでディナーをご馳走になった。ここには70代から80代の高齢者の人が家族や知人とテーブルを囲み、楽しく食事をしていた。

Bは20代の頃から南加山口県人会に時々参加していた。中年になり自分のルーツに興味を抱き、南加山口県人会の活動に継続して参加している。特に、2005年は山口県人会発足100周年にあたり、他の先輩5名とともに熱心に準備をした。その後、次の年に100周年記念誌を発行するために、かなりの貢献をした。

この冊子については、後の章で触れる。

#### 4 Cさんの場合

Cは祖父母と両親が日系ペルー人であり、1969年生まれの日系ペルー人三世にあたる。Cの叔母がロ

サンゼルスにいたので、1992年に留学（サンタモニカカレッジへ）のためにアメリカに来た。Cの兄（1967年生まれ、インディアナ在住）も同様にアメリカに留学して来て、兄弟共に現在はアメリカ国籍も取得しアメリカで仕事をしている。日系アメリカ人としては新一世である。

祖父母は共に岩国の出身である。祖父18歳、祖母17歳の時に日本で結婚し、ペルーに移住した。祖父の弟が仕事で先にペルーに行っていたので、後に続いて祖父母がペルーに行った。弟はコンビニエンスストアを経営していたが、日本に帰ってしまった。

ペルーでの名前は、ファーストネームをスペイン語で、ミドルネームは自由、そしてファミリーネームは先祖の名前の英語名という順番になるように法的に決められている。

祖父母は11人の子供をもうけた。Cの父親は3番目の子供だった。母親は静岡出身である。両親は第二次世界大戦以後にペルーに移住した。

ペルーでは山口県人会のビルがあるほどである。Cの父親は山口県人会の会長の経験もある人で、リマの空港会社の会長もしていた。父親は80歳だがまだ会社経営をしている。家は西本願寺系で今もペルーの実家には仏壇がある。

Cの妻は日系アメリカ人で親が不動産屋をしていた。本人は弁護士をしていたが、2年ほど前に亡くなった。Cは妻の家の不動産屋を継いでおり、ロサンゼルスを中心に世界で幅広く仕事をしている。さらに、ロサンゼルスを中心に共同システムでの日本語学校を運営もしている。日本人の先生は10名程度で、学生は70名程度である。

Cは4人の子供がいるが、その内3人はボストンで暮らしている。1人の息子はボストンの高校に行き、寄宿舎に住んでいる。娘2人は大学に進学している。もう1人の娘はカリフォルニア州の大学に通い、現在は日本の大学に交換留学で留学中である。子供は皆、日本語学校に通っており日本語ができる。

子供の意識として、自分達は日系人ではなく、日本人だと思っているという。実際にはペルー日系人の三世の子供なのでペルー日系人四世であるとともに、新日系アメリカ人二世である。子供たちは日本語を話すし感謝の気持ちも忘れていないという。

とは言え、彼ら子供たちのベビーシッターはヒスパニック系の人であり、子供の文化的背景への影響は否定できないだろう。

#### 5 南加山口県人会について

##### (1) インタビューから得られた概要

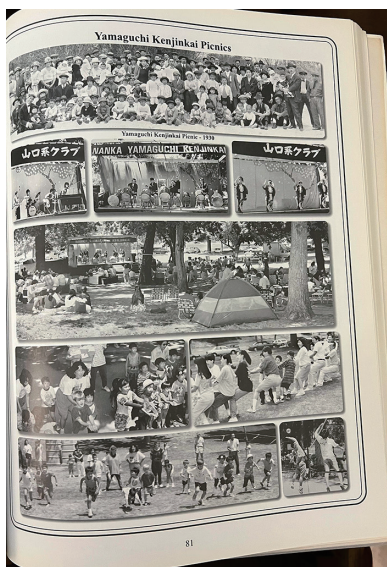
南加山口県人会は1905年に創設され100周年の年、2005年10月に盛大な記念式典と祝賀会が開催された。その後、この事業の開催を記念して、『山口

NANKA YAMAGUCHI KENJINKAI 1905-2005』(写真6)が2006年に出版された。大変分厚い冊子になっていて、南加山口県人会の会員の多くの寄付(1ページ分の掲載で1,000ドル)によって制作された。



6 『山口 NANKA YAMAGUCHI KENJINKAI 1905-2005』表紙

Cは2000年から県人会に入った。その頃は200人以上の会員がおり、新年会やピクニック等(写真7)を行っていた。現在、四世や五世が主流となってきて、結婚相手は多人種の混血の人が多くになっており、日本人のアイデンティティは難しくなっている。かつて行われていた祝賀会や追悼法要などは数年前に辞めたと言う。特に追悼法要は仏教が主流の時代の行事である。かつてはほとんどの人が神道と仏教であった。しかし、現在は他の宗教に改宗しているの、必然性がなくなっている。



7 南加山口県人会の活動

集まりが少なくなっている他の理由には、新世代の若者は伝統行事に興味を示さないこと、さらに、住む場所が自由になり、遠くに住む人も多くなってきて、来られないということがある。

2015年に山口県人会世界大会がロサンゼルスで行われた。2028年には山口県で開催される予定である。Bが言うにはこの県人会は創設当初は相互扶助の支え合いが中心であったが、現在はルーツ探しが主な役割になっている。Cはまだ比較的若い、会長として現在活躍している。

日系アメリカ人の宗教については、当初は日本の仏教の各宗派が進出して、寺院が一定の役割を果たしていた。しかし、現在ではキリスト教などに代わってきている。三世以降はアメリカ人としてアメリカに同化するために、改宗する場合がある。Bはインタビューで自分の意志で改宗したと述べた。

Cはペルー二世の両親の代からカトリックである。Aは家族が西本願寺系であった。母親のお寺の僧侶は、現代では日本人ではなく、白人とフィリピン系の三世である。

Aは現在も家族の仏壇を守っている。

宗教活動について、2020年から続いたコロナウィルスの蔓延により、BはZoomやYouTubeでも日曜日の礼拝をしており、実際に教会にも行くなどハイブリッド礼拝を取り入れている。

以下では、上記で紹介した創立100周年記念冊子『山口 NANKA YAMAGUCHI KENJINKAI 1905-2005』を参照して、県人会の歴史や意義などについて記す。

## (2) 山口南加山口県人会の年代記

- ・1902年 カキチ・ワキと他数人が県人会を組織するために会合を持ったが、まだ組織はできていない。ロサンゼルススのダウンタウンにあるリトル東京、サンペドロ通りに位置していたホテル「山口屋」(後に事務局が置かれる)で会合を持った。
- ・1905年 山口県人会が公式に組織化され、1906年の新年会で祝われた。
- ・1910年頃 活動が活発になる。日本からの移民が増加したためである。
- ・1925年 名前を防長海外協会 (Yamaguchi Oversea Society)と改名した。この協会は第2次世界大戦が勃発するまで活動された。
- ・1942-1946年 強制収容所時代CAMP YEARS
- ・1946年 ワイチ・ヨシムラのリーダーシップの元で、山口県人会として再組織化された。
- ・1957年 名前が南加山口クラブNANKA YAMAGUCHI CLUBに変わった。
- ・1973年 名前が再び南加山口県人会NANKA YAMAGUCHI KENJINKAIに変更された。

- ・1978年 青少年会 (Youth Group) が作られた。
- ・1980年 婦人会 (Women's Auxiliary) が再編成された。
- ・1981年 6月25日に創立75周年が祝われた。山口県 平井龍 (とほる) 知事が参加した。
- ・1990年 創立85周年が6月1日に祝われた。山口県 村井満副知事が参加した。
- ・1995年 創立90周年が7月30日に祝われた。山口県 平井龍知事が参加した。
- ・2000年 創立95周年が8月27日に祝われた。
- ・2001年 山口県の阿知須で山口きららエキスポ2001が開催され、県人会のメンバー30名が参加した。
- ・2004年 最初の山口県人会世界大会2004が10月に山口県山口市で行われ、15名のメンバーが参加した。
- ・2005年 創立100周年が10月23日に祝われた。二井関成知事が参加した。

### (3) 設立理由と活動

当初、日系移民一世によって設立された。まずは、移民者の同県及び同郷の町や村の人々と会うことで最初のステップを踏んだ。当初は病気、死亡、あるいはその他の不幸な出来事があったときに助け合う、いわゆる相互扶助が目的で活動された。Bが言うには、この10年以内にも独身の老人が入院した時に、県人会のメンバーが病院に見舞ったり、死亡した時に葬式を出したり、アパートの片付けをすることがあった。このことは今も当初からの相互扶助の精神が生きている証左である。

特に初期の頃はほとんどの移民が若く、独身だったので、県人会が同じ方言や感情を共有する社交の場を提供した。また新しい移民が来ると、県人会が新しい環境に彼らが落ち着くまでサポートした。またメンバーが大金を必要としていた時には、銀行のローンではなく、頼母子講Tanomoshi Koつまり非公式の県人会内の信用ローンでサポートした。

南加山口県人会は世界山口県人会を構成する1組織でもあり、代表は世界大会に参加し、交流を深めている。ロサンゼルスにおける南加山口県人会の他に広島県、熊本県、和歌山県、そして沖縄県の県人会があるが、中でも規模が大きいのは沖縄県と広島県だ説明を受けた。滋賀県もあったが無くなった。

## 5 全米日系人博物館でのフィールドリサーチ

### (1) 全米日系人博物館の概要

前後して言うと2023年9月7日に山口県人会の3名と全米日系人博物館で待ち合わせをした。そこで、ドセントと言われている日系の新一世の女性THが皆を案内した。

この博物館は日系アメリカ人の歴史と文化を多民

族国家アメリカの歴史の一部として伝えていくために創設された。特にキャンプの問題を展示することが目的だったと、Bはインタビューに答えた。キャンプの存在と強制収用という人種差別の事実をアメリカの一部に位置づける事が、主な創設の理由であった。

第二次世界大戦に関して、日系人の歴史文化で重要なことは、キャンプの存在と442連隊である。しかしながら、関わったほとんどの日系人が、それらの体験を語らなかった。自分の子孫にさえである。

そのことを明かすエピソードがある。小学生の男の子が学校でファミリーヒストリーを書くという宿題が出た。そこで、彼はロサンゼルスで生まれたと書いた。しかし、彼の生まれは戦時中である。先生からキャンプで生まれたと指摘された。親はキャンプで産んだことを恥じて、子供にさえ言っていなかった。Bも父親から一切、聞いていなかったという。

創設のために、1985年にロサンゼルス在住の多数の日系企業経営者と第2次世界大戦退役軍人によって活動が始められ、諸機関で持ち合わせた日系アメリカ人のリストの住所に、寄付の手紙が届けられた。Bも寄付をしたという。実際には、1992年に博物館は民間非営利団体として、ロサンゼルスの旧西本願寺の建物を本部として開設された。

1999年には現在の新館ができて規模もスタッフも増えた。展覧会の企画においても、アメリカ全土、南米および日本にも巡回するなど、活動の規模や範囲も拡大されている。

本館である西本願寺羅府 (ロサンゼルス) 別院 (写真8) は、日本からの移民有志によって1925年に完成されたものである。第二次世界大戦勃発により日系人がキャンプに抑留されるまでは、日系人の信仰と社交の場であり、同時に日系人文化の発信地であった。リトル東京において重要な役割をしていた場所である。その後、修復により改装された西本願寺羅府別院は、1985年に国家重要史跡に指定されたために、歴史的建造物としても知られている。

今回の主な訪問場所である新館は、スミソニアン航空宇宙博物館の設計でも知られるギョウ・オバタによって設計された。館内にはギャラリー、ミュージアム・ショップ、収蔵庫、ライブラリーを備えたナショナル・リソース・センターなどが配置されている。

現在、この博物館はロサンゼルス市、カリフォルニア州、企業や個人の寄付によって運営されている。

以下ではドセントTSの案内で得られた知見について、記述する。膨大な資料を背景として、重要な点が説明されたので、可能な範囲で書き取った情報をまとめ、以下で記すことにする。





8 西本願寺露符別院

展示の主な構成は、移民、戦争そして戦後についてである。

### (2) 移民について

1868年に元年者が密航の形でまず、ハワイに約150名程度の日本人が移民した。ここに参加した人々は東京で集められたことにより、多くの者には農業経験がなかった。それゆえに、一種の悲劇が起きる。3年後の統計では、50名が途中で日本に帰国し、50名がハワイに残り、そして最後の50名がアメリカ本土に渡った。

当時は15時間にも達する過酷な労働であった。皆がサトウキビ畑やパイナップル畑で働いた。女性の服装はサトウキビや虫、さらに太陽の日差しから体を護るために、長袖、ブーツ、ロングスカート姿であった。日本から持参した緋の着物で洋装の仕事着を作った。

1915年の写真花嫁Picture Brideの写真(写真9)を見ながら説明があった。当時、移民した人の75%が若い男性であった。彼らは3年契約であったが、1800年末頃から1900年の始め頃になると、アメリカに残って生活しようと決意する者が多くなる。そこで、前述したように当時はアメリカでは異民族との結婚が法的に許されていなかったため、日本に帰って花嫁を見つけるか、他の方法を考える必要があった。そこで、写真花嫁の制度が生まれる。

写真花嫁を迎えるために、自分の親、故郷の村長、あるいは学校の先生から紹介を得る方法をとった。つまり花嫁は同郷の人であることが特徴である。とは言っても、男性側の写真は他人の写真や若い頃の写真が送られた場合もあり、写真花嫁は予想と違って帰国する者もいた。しかし、渡航費も高額であり、また両親に対する配慮から簡単には帰れないので、我慢して結婚生活を送るものや離婚するものもいた。Bによる情報では花婿が花嫁を迎える場所で、互いに話し合い相手を変えて結婚生活を送るものさえいた。

次に、日系移民の一世から二世に指導されたキーワードがある。「我慢」「仕方がない」「子供のため」「大学に行かせる」である。アメリカ社会における日本人の民度の高さは、こうした指導に下支えされていると言う。



9 写真花嫁

### (3) 第二次世界大戦とキャンプ

次に第二次世界大戦の頃の話である。1941年12月7日(日本は8日)開戦記念日で、この頃に全米(アメリカ本土)で日系アメリカ人は127,000人以上が住んでいた。カリフォルニア州、オレゴン州そしてワシントン州にその人口の90%が居住し、その内、80%が二世で10%が一世であった。

1942年2月19日にルーズベルト大統領が大統領行政命令9066号を発令した。それは、1滴でも日本人の血が混じっている人は、日系人とみなされ、西海岸から排除するというものである。大統領令が発令されてから10日から2週間しか時間が与えられなかった。ロサンゼルスに住んでいた日系人のために、西本願寺羅府別院がキャンプ(写真10)に行くための集会所になっていた。荷物は自分で持てるだけの2つのスーツケースだけが許された。それまで築いてきた家やあらゆる財産は二束三文で売られる、あるいは放置された。

日系人の家は戦前からFBIによるリサーチでリストアップされていた。特に仏教の僧侶、日本人学校の教師、県人会コミュニティのリーダー、武道の師匠(軍国主義の象徴に思われた)やNo No Boysと呼ばれた入隊せずアメリカに反抗した人々は、刑務所に入れられた。

一般の日系人は全米に、にわかで作られた10ヶ所(すべて異なった州)のキャンプ(強制収容所)に入れられた。これらのキャンプは、砂漠や沼地の真



10 日本人戦闘部隊

ん中で人も動物も住んでいないような不毛の地に建設された。日系人が多くいた場所はキャンプの建設が間に合わず、まずは馬小屋に収容された。こうした非人道的な扱いを日系人が受けていたのだ。

Aの祖母はハートマウンテンHeart Mountainと言うキャンプに入っていた。黒い壁の家で、この黒はゴムをコールタールに付けたものが壁に塗られていた。使われていた材木はまだ乾いていない木だったので、時間と共に縮んで壁に隙間ができる。冬はマイナス20℃にもなり過酷な環境であった。それ故に、多くの人が病気になり亡くなった。

キャンプの建物の1棟に8つの家族が住んでいた。1つのユニットに裸電球が1つ、水道はない。ブロックごとに食堂、トイレ、そしてシャワーがあった。最も人々を苦しめたのは、トイレや部屋に境目がなく、プライバシーが保てなかったことである。そこで、日系人は政府に嘆願書を出しその結果、仕切りを作ることが許された。生活パターンは刑務所と同じだった

子供たちはこの中に開設された学校で勉強をしていた。スポーツをしてボールが柵の外に行き、ボールを取りに行こうとした時に、監視の兵隊に撃ち殺されることもあった。先生として教えていた日系人はわずかながら給料ももらっていた。こうした収容所の生活は1945年末まで続いた。

長い人は3年半入っていた。戦後、40年かけてキャンプに入れられた日系人の補償が行われた。オバマ大統領は日系人を強制的に悲惨な環境のキャンプに入れた歴史について、'Darkest chapter of our history' とスピーチで述べた。戦後補償については後に展示されていた。

キャンプに入れられなかった例外がある。Bの母方の叔母(岩国出身)は夫(和歌山出身)とともに、ネバダ州の北の町、ラブロックに暮らしていた。ここでは日系人の家は1軒しかなかったため、キャンプに行くことは強要されなかった。その代わりに、

半径50マイル(約50km)以上の場所に出てはいけないという規則に縛られた。

#### (4) 軍隊への志願と第442連隊戦闘団結成

442連隊(写真11)は士官以外には日系アメリカ人だけの編成部隊で、1942年6月15日にハワイで結成されて、本土に広がった。本土の多くの日系人男性はアメリカ人であるにも関わらずキャンプに入れられ差別を受けていた。そこで日系の若者は442部隊に参加して、自分のアメリカへの忠誠を証明したいと考えて登録したものが多くいたという。



11 強制収容所風景

1939年における第二次世界大戦の開戦、そして1941年12月8日の日本海軍による真珠湾攻撃の結果、日本はアメリカの直接的な敵国となった。それ故に、日系人は徴兵の対象ではなかった。しかしながら、1943年になると兵隊が少なくなり、日系人も志願兵として募集された。まず、ハワイで予想の10倍の若者が集まった。そこで日系人だけの連隊である442連隊が作られることになった。二世や三世はアメリカ人にも関わらず差別を受けていたので、志願することでアメリカに忠誠を示し、功なして認められる機会だと考えた。

本土の日系人はキャンプに入れられており、最初は応募する機運は少なかったが、徐々にハワイの日系人に続いて志願する輪が広がっていった。彼らはアジアに派遣されることは少なく、主にヨーロッパに派遣された。イタリアやフランスなどで過酷な戦いの中、勝利を挙げ、最も賞賛されることになった。とは言え、多くの日系人がこれらの戦いで戦死することになった。

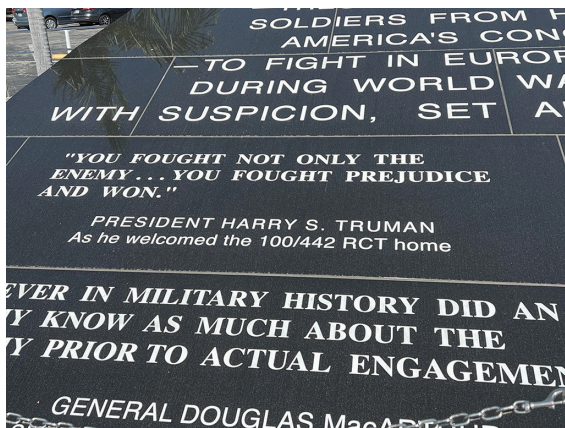
彼らの合言葉に「当たって砕けろGo for Broke」がある。日本の特攻隊のイメージに近い精神性が見られた。実際には彼らの祖父母は日本に暮らしているものが多く、沖縄戦では苦しい立場にいた。

具体的な戦功について、442連隊はヨーロッパ戦

で、自国の他の連隊を助けたこととイタリアやフランスの人々をドイツから守って村を解放したことなどがある。前者については、フランスとドイツの間にあるヴォージュの山でテキサスから来ていたアラハ隊がドイツ兵に囲まれていた時に、全員を救出した。その時に、442連隊の兵士の多くが亡くなった。現在、イタリア、フランス、そしてヴォージュの山に亡くなった兵士の墓がある。また、テキサスでは、今でも442連隊の兵士たちは尊敬されている。

ルーズベルト大統領（任期1933年3月4日-1945年4月12日）が亡くなり、次にトルーマン大統領（任期1945年4月12日-1953年1月20日）になって、1946年にワシントンDCで442連隊のパレードが雨の中行われた。トルーマン大統領はその時に、「君達は敵だけではなく、差別とも戦った。そして勝利した。」

(写真12) と宣言した。



12 日系人部隊記念碑に刻まれた  
トルーマン大統領の宣言の言葉

日系人の人権問題が繰り返し議論された。キャンプにおける事例を再度見てみよう。Bの父親が入っていたのはマンザナキャンプである。1.6km四方の広さで1万数千人が暮らしていた。有刺鉄線に囲まれており、火の見櫓のような監視塔から絶えず見張られていた。銃が向けられた方向が問題視された。

その後、レーガン大統領の時代に戦後補償が実現される。1988年、つまり戦後43年経って、市民の自由法が制定され、日系人への人権侵害があったことが世界に宣言された。キャンプに入れられ、その時に生存していたすべての人に2万ドルが支払われた。そして父ブッシュ大統領が日系人へお詫び状を出して、日系人の戦争が終わった。その結果、日系人のステータスが高まった。民度の高さが認められるとともに人種差別に打ち勝ったことが尊敬された。

キャンプにおいて悲惨なことばかりではないので、ここで加えておきたい。キャンプにいた日系人は、荒れ果てた土地ではあったが、庭を作り、畑を作った。そこで、和野菜などを植え、また木屑から

アクセサリーや家具を作った。また、キャンプの中でもショッピングができた。当時、シアーズなどのデパートはカタログ販売をしていた。ここではナチスドイツが制服を取容者に着せていたのとは異なり、自分の手持ちの服あるいは上記のように購入した服を着ていた。

お金について、キャンプの外で働く機会があり、少額の支払いを受けることもあった。また特別な専門的能力がある人は普通の給料の半額が支払われた。有刺鉄線の中で、人々は創意工夫をするなどわずかな仕事をして、少しでも豊かな暮らしをしようと努力していた。

彼らは終戦後、解放された時に、自分達が行く場所への片道切符代として、25ドルの現金が与えられるのみだった。

#### (5) ハワイの日系人とダニエル・K・イノウエ

ハワイでは日系人が全体の人口の1/4を占めるために、ハワイの経済や社会が混乱すると判断されて一般人向けのキャンプはできなかった。要注意人物と思われたリーダー的人物のみがハワイに作られたキャンプに強制収容されていた。しかし、このことは日系人でさえ長い間、知られていなかった。

442連隊への志願は全体の80%がハワイの日系人だった。この中に、日系人で初めて下院議員になったダニエル・K・イノウエ（1924-2012年）がいた。彼もヨーロッパの戦いに参加し、片腕をなくすほどの状況の中で、耐えて立派に戦った。日系二世のイノウエたちは、この勲功により高く評価された。これは志願の意図であるアメリカに忠誠を誓うという意志を示すことを実現するものである。

イノウエは戦後も下院議員及び上院議員として多くの功績を上げた。50年以上の間、国の議員を務め、最後は最長老でもあった。その結果、ハワイを代表するハブ空港であるホノルル国際空港は2017年4月にダニエル・K・イノウエ国際空港に改名された。

#### (6) 全米日系人博物館創設とアイリーン・ヒラノ・イノウエ

この章の最初に、全米日系人博物館創設の経緯について記した。インタビューを通して、ダニエル・K・イノウエの2番目の妻、アイリーン・ヒラノ・イノウエ（1948-2020年）が貢献したことが述べられた。

アイリーンは日系三世としてロサンゼルスに生まれた。父方の祖父母は福岡県出身で、母親は日本生まれである。彼女は南カリフォルニア大学で公共行政学を学んだ。初期では多数の非営利団体で社会貢献活動をしていた。また、女性の社会進出におけるエンパワメントの領域でも活躍した。

創設に向けて多大な貢献をしたことから、1988年に全米日系人博物館の館長・会長に就任された。こ

の博物館は1992年に開館されて以来、日系アメリカ人の歴史に関する展覧会や、他の団体・博物館との交流を通じて、その任務を果たし続けている。後に博物館はスミソニアン学会と合併した。

その他、ヒラノ・イノウエの代表的な仕事として日米カウンシルの初代会長（2009年創設-2020年）がある。

#### (7) キャンプの建物の展示

展示の最後のコーナーには本物のキャンプの建物の一部が移設されて展示されていた。Bの証言では、新館の建設中にキャンプの建物の絵を描いた看板が建てられていたという。全米日系人博物館が、キャンプを通じて日系人が受けた非人道的な負の遺産をアメリカの歴史と文化に刻むために建てられたことが理解される。

真珠湾攻撃の後、敵国の日本から来た日系人は敵対視され、一般市民からの偏見や差別を受けていた。暴力もあった。そうした状況の中では、過酷で悲惨なキャンプの環境ではあったが、Bが聞いた話では、キャンプが日系人を救ったという説を言う人がいる。

語られなかったキャンプの物的証拠を通じて、二世あるいは三世の子孫やアメリカ合衆国の国内外の人々が、日系移民の人々が受けた非人道的な扱いを具体的に想像することができる。戦後保証以後の開館なので、キャンプの建物の展示は、世界にその実態を伝える象徴的なものとなっている。

## 6 グループインタビュー

### (1) 広島出身のDについて

Dは7人兄弟の4男で、86歳の日系二世である。ロサンゼルスで看護師として心臓病棟で長年、勤めていた。知人の勧めで老人医療に興味を持ち、現在も介護施設に勤めている。日本語が話せるので、介護において非常に喜ばれると言う。

父親は尋常小学校を出てからフィリピンに行き、アメリカ人の家庭に住み込みスクールボーイをして、家の手伝い全般や皿洗いなどをしていた。15、16歳の頃にアメリカに渡り、語学学校で英語を学んだ。その後大学で学び、卒業後は食料品店を経営した。母親は両親の薦めで写真花嫁として、アメリカに渡った。父親と同郷であった。

両親は戦況を読んで、子供を連れて1945年2月3日に日本へ向かう氷川丸の最終便で帰国した。その結果、不幸にも両親と兄弟の全員がそれぞれの場所で被曝した。2女は日本に帰国後すぐに日本でなくなったが、他の6名の兄弟は10歳の長女を始め幸い存命である。

長男が背負われていたので、背中や顔に火傷を負ったが、母親が人に聞いて、米俵を燃やしてできた灰とアロエを混ぜて作った手作りの塗り薬を、毎

日、顔と背中に塗って治療した。幸いに現在、91歳の長男はケロイドが全くない。長女も字品で被曝したが、前述したように100歳で元気に過ごしている

### (2) 移民の教育環境事情

ここでのインタビューは大学教員と大学生がいる母親など、日系新一世に行ったものである。教育機関で民族を平均的に入学させるAffirmative Action（以下ではAAと記す）があった。アジア系の生徒は成績がいいので、この制度は不利だった。AAは最高裁判所で違法となり、終結した。ノースカロライナでは何十年もこの法律と闘っていた。ミシガンでは学部では許されていたが、大学院では専門性が強いのでAAは許されなかった。今まではAAの下でアジア系の若者に不利だったが、法律が変わってから、ヒスパニックや黒人が入学試験で不利となった。

アメリカの大学で、現在、大学ランキングを上げることが受験生獲得に非常に重要な要素となってきている。寄付を募るためにフットボールチームを作る、またリゾートホテルのような施設を作り、生徒集めの魅力にしている。その結果、授業料が上がるという悪弊もある。

日系三世の親は、親の教育方針の元で、勉強をしていい大学を目指した。しかし、いい大学を出てもいい職業に就けなかった。それ故に、四世の子供たちにはいい大人になってくれたらいいという考え方で、教育ママのような態度は少なくなった。

一方、日本からの留学生はゆとり教育が反映しているのか、高い点をとっていい大学に行かなければならないというハングリー精神が弱まり、勉強への情熱が減退してきているという意見が複数出た。

## 7 まとめ

今回のフィールドスタディは、南加山口県人会をフィールドとして、まずは移民の実態をインタビューから把握することを目的とした。同県人会に所属する日系三世A、Bそして新一世のC（ペルーの日系三世）へのインタビューを通じて、日系一世や二世の生き方、あるいは四世である子供の日系人としての意識の一端が理解できた。

彼らの先祖である一世や二世は経済的な成功の後に郷里に錦を飾るという夢を抱いて移民してきた。しかし、彼らの祖先はアメリカ本土に留まる、あるいは帰米して生涯を過ごした。

南加山口県人会は、相互扶助を目的として日系一世によって創設された。現在でもその相互扶助の精神と行動が生きていることが理解された。県人会は同郷つまり山口にルーツを持つ人々が集まり、自らのルーツ探しに役立てられている。日系四世や五世では混血が進んでいるために、純粋な日系人が数十

年の間にいなくなると推定されている。その結果、日系移民の一世から二世に指導されたキーワードである「我慢」「仕方がない」「子供のため」「大学に行かせる」の精神は、風化しつつある。

しかし、希望はある。私見ではあるが、県人会が機能することで、日本人のアイデンティティとしての精神性が、現代アメリカの価値観や行動様式と融合することで、日系移民の子孫としての自覚や価値観が生まれる可能性がある。日系三世の人々は上記のような二世の教えを受けて、よく学び、よい職業に就き、豊かな暮らしをしている。今後、南加山口県人会がどのように存続し、機能を発揮し続けていくかについて期待しながら見守りたい。2028年に山口県で世界山口県人会大会が行われるので、可能な範囲でインタビューをして山口の世界の県人会を比較検証したいと考える。

アメリカ合衆国本土やハワイと山口の地元との交流において、親戚が移民した山口県で暮らす家族にも精神的あるいは物質的な影響が少なからずあったに違いない。そこで今後の課題として山口県の家族へのインタビューを実施し、日系人家族との交流がもたらした生活文化について調査することは有意義だと考える。

## 謝辞

本稿のためのフィールドワークをするにあたり、南加山口県人会と繋いで頂いた山口県議会柳井俊学議長及び県議会スタッフ及び山口県国際交流課の皆様へ深くお礼を申し上げます。また、現地での受け入れに関するコーディネーターや研究内容にご指導ご鞭撻を頂いたオオタヤミチコ様を初め、お名前を出せませんが、インタビューの皆様へ改めてお礼を申し上げます。また、日本からの留学生に関する実態調査へのアドバイスを頂いた故内閣総理大臣安倍晋三夫人安倍昭恵様にもお礼を申し上げます。

## 参考資料

『日系アメリカ人の歴史』全米日系人博物館、2001年。

『山口 NANKA YAMAGUCHI KENJINKAI 1905-2005』南加山口県人会、2006年。

### 参考URL

白石藍子、日系アメリカ人のエスニック・アイデンティティ ～戦後生まれ三世を中心に～ 「慶應義塾大学」<http://fs1.law.keio.ac.jp/~kubo/seminar/kenkyu/sotsuron/sotsu12/shiraishi.pdf> 2023年8月31日取得。

442連隊退役軍人・Terry Shima氏インタビュー 2011年9月2日「株式会社ニチマイ」<https://www.nichimyus.jp/2011/09/02/442%E9%80%A3%E9%>

9A%8A%E9%80%80%E5%BD%B9%E8%BB%8D%E4%BA%BA-terry-shima%E6%B0%8F%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%93%E3%83%A5%E3%83%BC/ 2023年12月23日取得。

## 写真撮影

1-12 (7, 9, 10, 11以外) 撮影 水谷由美子  
出典

7『山口 NANKA YAMAGUCHI KENJINKAI 1905-2005』南加山口県人会、2006年、表紙。

8 先掲書、81頁。

10 先掲書、2001年、11頁。

11 先掲書、14頁。

12 先掲書、15頁。